

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

『源氏物語』漢籍典拠小考：  
「まことの聖にはしけれ」と「白虹日を貫けり」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 源氏物語, 典拠, 漢籍, 白氏文集, 文選 作成者: 陸, 穎瑤, Lu, Yingyao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000499">https://doi.org/10.57529/00000499</a>

## 『源氏物語』漢籍典拠小考

— 「まことの聖にはしけれ」と「白虹日を貫けり」 —

陸 穎瑤

## 一、先行研究の問題意識と本稿の視点

平安朝国文学の最高峰とも言える『源氏物語』は、『史記』から『白氏文集』に至るまで数多く漢籍を典故とし、中国古典から発想を得て物語自体の構造化に成功したと見られる要素もある。

『源氏物語』の『白氏文集』引用については、今まで夥しい研究成果が出されてきた。<sup>1)</sup>しかし、物語が引用した『白氏文集』以外の漢籍に関する考察はまだ十分とは言えず、時にその考証

の方向性に懸念すべき点が残っているとこもある。古注釈書やそれを利用して漢籍の引用を解釈する近代の研究は、常に最古の漢籍を典拠とするが、元より初出の用例より、紫式部が実際に如何なる漢籍を読解し、引用雛案に至ったのかを慎重に吟味すべきと、筆者は考えている。

ここでまず先行研究を振り返り、筆者の若干の見解を記しておく。

古沢未知男氏は、『源氏物語』の漢籍引用についての系統的な研究の中で、典拠を決定する場合は「二つ以上の出典があつたり、或は類似共通したもの等があつて、其の何れを採るべき

かに迷ふ事がある」と述べられる。<sup>2)</sup>この古沢氏の指摘の通り、源氏本文の典拠と考えられる漢籍或いは漢詩文は複数存在するが、その選択に当たって、筆者も単純に最古の文献を典拠と扱う姿勢に疑問を抱いている。

ここでまずその中から二例を引用したい。

一例目は、若菜下巻の太政大臣の致仕を巡る一節である。

世の中の常なきにより、かしこき帝の君も、位を去りたまひぬるに、年ふかき身の冠を掛けむ、何か惜しからむ。

(若菜下 四—157)

冠を掛け、車を惜しまず棄ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし。

(若菜下 四—266)

「冠を掛け」・「冠を掛け」の最古の典拠は、『後漢書』「逢萌伝」の「即解冠挂東都城門歸(即ち冠を解きて東都の城門に掛けて歸る)ではある。しかし、「惜しむ」という言葉との併用により、古沢氏は『白氏文集』巻三「不致仕」の「挂冠顧翠綉、懸車惜朱輪」(冠を掛けんとして翠綉に顧み、車を懸けんとして朱輪を惜しむ)を用いたと認められた。<sup>3)</sup>この視点が重要であろう。

二例目は、久保堅一氏の最近の指摘のように、須磨巻の光源

氏と宰相中将の離別が描かれる一節に典拠とすべきは、これまで定説とされた「古詩十九首」第一首「胡馬依北風(胡馬は北風に依り)」の一句ではなく、白居易「秦中吟十首」第四首「傷友」の「蹇驢避路立、肥馬當風嘶」(蹇驢は道を避けて立ち、肥馬は風に當たりて嘶ゆ)の一句だということである。<sup>4)</sup>須磨巻の原文は次の通りである。

さるべき苞など、よしあるさまにてあり。主の君、かくかたじけなき御送りにとて、黒駒奉りたまふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に當たりては嘶えぬべければなむ」と申したまふ。

(須磨、二—215—216)

「傷友」が典拠とされた可能性は、既に『光源氏物語抄』に指摘されたが、後に『河海抄』など古注釈に継承された形跡が認められず、そのため近代の注釈にも採られなかったようである。しかし、字面の相似はともかく、単純に故郷を憶う感情を吟じる「胡馬依北風」の句と比べれば、やはり源氏が「傷友」の引用を通して、自分の不遇を哀れみながらも中将との友情を確かめ合うと見定めるほうがよりの確な判断だと思われる。

上記二例は、表現が類似する最古の文献ではなく、『白氏文集』

の詩を典拠とすべきとの見解が明示される。この実例からも『文集』が『源氏物語』の漢籍引用にいかん重要な役割を担っているのが再確認される。白居易自身も百科全書的な類書『白居易六帖』を編纂した経験があり、作詩法も古典文献を自在に操り、多様な典故を引用する特徴が顕著である。式部は膨大な漢籍すべてに目を通したのではなく、『白氏文集』を熟読した上、『文集』から四部の典故を知り得て引用したと推測するのが、むしろより実情に近いのではないか。つまり式部は、『文集』を通じてその引用を辿ることで、多様な古典に触れたのではないだろうか。

『源氏物語』の漢籍引用に関する諸問題は、研究の長い歴史に比して、今に至るまでまだ十分に解明されたとはいえないであろう。そこで本稿は新たに物語の漢籍引用の二例「まことの聖にはしけれ」（漣標卷）と「白虹日を貫けり」（賢木卷）を採り上げ、その典拠について少しく検討してみたい。この問題を通じて、『源氏物語』の漢籍引用及び国文学における漢籍典拠考証に存在する一般的視点、または方法の問題点を聊か論じてみたい。

## 二、「まことの聖にはしけれ」と「答四皓廟」

漣標卷のはじめに、朱雀帝が退位の決心をつけ、東宮は元服して即位した一節がある。その時、すでに致仕した左大臣は一度再任することを辞退したが、周りの人々に勧められ、ようやく再び出仕し、摂政となった。

「人の国にも、こと移り世の中定まらぬ折は、深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ。病に沈みて、返し申したまひける位を、世の中変はりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう、公、私定めらる。」

（漣標 二―273）

従来ここは『史記』「留侯世家」の、以下の一節を引用したと言われている。漢の高祖劉邦は呂后との間に儲けた太子劉盈に代えて、戚夫人の息子の趙王如意への立太子宣下を画策した際、対する呂后は、張良の献策に従って四人の老隠者を太子に仕えるように説得し、高祖はそれにより太子の人望を認めざる

を得なくなり、太子廢嫡を諦める仕儀となった。その原文は以下の通りである。

漢十二年、上從擊破布軍歸、疾益甚、愈欲易太子。留侯諫、不聽。因疾不視事。叔孫太傅稱說引古今、以死爭太子。上詳許之、猶欲易之。及燕、置酒、太子侍。四人從太子、年皆八十有餘、鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪之、問曰、彼何爲者。四人前對、各言名姓。曰東園公、用里先生、綺里季、夏黃公。上乃大驚曰、吾求公數歲、公辟逃我、今公何自從吾兒游乎。四人皆曰、陛下輕士善罵。臣等義不受辱、故恐而亡匿。竊聞太子爲人仁孝、恭敬愛士、天下莫不延頸欲爲太子死者、故臣等來耳。上曰、煩公幸卒調護太子。

漢の十二年、上、布の軍を撃ち破りてより歸り、疾益々甚だしく、愈々太子を易へんと欲す。留侯諫むれども聽かず。疾に因りて事を視ず。叔孫太傅稱說して古今を引き、死を以て太子を争ふ。上、詳りて之を許すも、猶ほ之を易へんと欲す。燕に及び、置酒するに、太子侍す。四人、太子に従ひ、年皆八十有餘、鬚眉皓白、衣冠甚だ偉なり。上、之を怪しみ、問ひて曰く、「彼は何爲る者ぞ」と。四人前みて對へ、各々名姓を言ふ。曰く、「東園公、

用里先生、綺里季、夏黃公」と。上乃ち大いに驚きて曰く、「吾、公を求むること數歲なりしが、公、我を辟逃せり。今、公何によりて吾が兒に従ひて遊ぶか」と。四人皆曰く、「陛下は士を輕んじ善く罵る。臣等、義として辱を受けず、故に恐れて亡げ匿れたり。竊に聞く太子は人と爲り仁孝たり、恭敬にして士を愛し、天下頸を延ばして太子の爲に死するを欲せざる者莫しと、故に臣等來れるのみ」と。上曰く、「公を煩して幸はくは卒に太子を調護せんことを」と。

「留侯世家」の文章を濬標卷と対照すれば、「白髮」と「鬚眉皓白」は一致した要素ではあるが、「深き山に跡を絶えたる」という四人が出仕する前に隱居としていた理由について、「留侯世家」の四人の老高士は「陛下は士を輕んじ善く罵り、臣等義として辱を受けず、故に恐れて亡げ匿れたり」と説明する。つまり高祖劉邦の罵言による辱しめを避けるためとあるのである。対して濬標卷では「こと移り世の中定まらぬ」、世の中の乱れのためとしている。ここには治世に対する決定的な価値観の相違がある。「まことの聖にはしけれ」は、左大臣の側近の意見と見定めるのは差し支えないが、中国古典中に依拠する

文脈が見出せないとなると、やはり「まことの聖」との評価は、直接には四人を評価しない『史記』のテキストを典拠とするには、かなり飛躍した感を禁じ得ない。

では、この滯標卷の一節の典拠と比定される文献は、いかなるものが想定されるであろうか。この前漢初期の東宮位の争奪にまつわる「商山四皓」伝説は、後世に伝承され、晋に至ると皇甫謐はそれを「高士伝」の一節として定着した。「四皓」が最終的には太子に出仕した事実が、恐らくは意図的に省略され、隠者のイメージのみが強調して描かれるのであろう。

四皓者、皆河内軹人也、或在汲。一曰東園公、二曰角里先生、三曰綺里季、四曰夏黄公。皆修道潔己、非義不動。秦始皇時、見秦政虐、乃逃入藍田山而作歌曰（中略）乃共入商洛、隱地肺山、以待天下定。及秦敗、漢高聞而徵之、不至。深自匿終南山、不能屈己。

四皓なる者、皆河内の軹の人なり、或いは汲に在り。一を東園公と曰ひ、二を角里先生と曰ひ、三を綺里季と曰ひ、四を夏黄公と曰ふ。皆道を修めて己を潔くし、義に非ずんば動かず。秦始皇の時、秦政の虐を見、乃ち逃げて藍田山に入りて歌を作りて曰く、（中略）乃ち共に商

洛に入り、地肺山に隠れ、以て天下の定まるを待つ。秦の敗るるに及び、漢高（劉邦）聞きて之を徵すも、至らず。深く自ら終南山に匿れ、己を屈する能はず。

ここで初めて、「四皓」が隠居する原因は秦の暴政と乱世に遭った事にあると、明確に記される。もちろんこの「原因」もあくまでも作者の皇甫謐の推測ではあるが、同じく晋の陶淵明の「贈羊長史」（羊長史に贈る）詩に「多謝綺與用、精爽今何如。紫芝誰復採、深谷久應蕪」（綺と用とに多謝せよ、精爽今は如何と。紫芝誰か復採らん、深谷久しく應に蕪るるべし）の四句もあり、また「綺與用」こと綺里季と用里先生に代表される四皓の生活を、いわば隠者のイメージ通りに描く。

後世の「四皓」伝説は、ほぼこのイメージに基づいており、そこから暴政と乱世を避けて潔く身を修めた四人を祀る「四皓廟」も建てられた。

中唐になると、元稹はまず「四皓廟」詩において、この伝説について議論を展開し、旧知の白居易は唱和の「答四皓廟」（四皓廟に答ふ）詩を作り、元慎とは別の見解を示している。それは次掲の「白氏文集」卷二の「和答詩十首」の一首である。<sup>(8)</sup>

天下有道見 無道卷懷之

天下に道有れば見え、道無ければ之を卷きて懷にす

子房得沛公 自謂相遇遲

子房 沛公を得、自ら謂ふ相遇ふこと遅しと。

此乃聖人語 吾聞諸仲尼

此れ乃ち聖人の語、吾 諸を仲尼に聞けり。

八難掉舌樞 三略役心機

八難 舌樞を掉かし、三略心機を役す。

矯矯四先生 同稟希世資

矯矯たる四先生、同に稟く希世の資。

辛苦十數年 晝夜形神疲

辛苦すること十數年、晝夜形神疲る。

隨時有顯晦 秉道無磷縮

時に隨ひて顯晦有り、道を秉りて磷縮無し。

竟雜霸者道 徒稱帝者師

竟に霸者の道を雜へ、徒に帝者の師と稱す。

秦皇肆暴虐 二世邁亂離

秦皇 暴虐を肆にし、二世亂離を邁る。

子房爾則能 此非吾所宜

子房 爾は則ち能、此れ吾が宜しとする所に非ず。

先生相隨去 商嶺采紫芝

先生 相隨ひて去り、商嶺に紫芝を采る。

漢高之季年 嬖寵鐘所私

漢高の季年、嬖寵は私する所に鐘まり、

君看秦獄中 戮辱者李斯

君看よ 秦獄の中、戮辱せらるる者は李斯。

冢嫡欲廢奪 骨肉相憂疑

冢嫡をば廢し奪はんと欲し、骨肉 相憂疑す。

劉項爭天下 謀臣競悅隨

劉項 天下を争ひ、謀臣競ひ悦びて隨ふ。

豈無子房口 口舌無所施

豈に子房が口無からんや、口舌 施す所無し。

先生如鸞鶴 高入冥冥飛

先生は 鸞鶴の如く、高く冥冥に入りて飛ぶ。

亦有陳平心 心計將何爲

亦た陳平が心有るも、心計將に何をか爲さん。

君看齊鼎中 焦爛者酈其

君看よ 齊鼎の中、焦爛せらるる者は酈其。

皓皓四先生 高冠映彪眉

皓皓たる四先生、高冠 彪眉に映す。

從容下南山

顧眄入東闈

從容として南山を下り、顧眄して東闈に入る。

前瞻惠太子

左右生羽儀

前みて惠太子を瞻れば、左右に羽儀を生ず。

却顧戚夫人

楚舞無光輝

却きて戚夫人を顧みれば、楚舞 光輝無し。

心不畫一計

口不吐一詞

心に一計を畫せず、口に一詞を吐かず。

暗定天下本

遂安劉氏危

暗に天下の本を定め、遂に劉氏の危ふきを安んず。

子房吾則能

此非爾所知

子房 吾は則ち能、此れ爾が知る所に非ず。

先生道既光

太子禮甚卑

先生 道 既に光れり、太子 禮 甚だ卑くす。

安車留不住

功成棄如遺

安車 留めて住めえず、功成りて 棄つること遺れたるが如し。

如彼旱天雲

一雨百穀滋

彼の旱天の雲の如く、一たび雨ふりて 百穀滋ふ。

澤則在天下

雲復歸希夷

澤ひ則し天下に在らば、雲

勿高巢與由

勿尚呂與伊

は復た希夷に歸る。巢と由とを高しとする勿かれ、呂と伊とを尚ふ勿かれ。

巢由往不返

伊呂來不歸

巢由 往きて返らず、伊呂來りて歸らず。

豈如四先生

出處兩逶迤

豈に四先生の、出處 兩つながら逶迤たるに如からんや。

何必長隱迹

何必長濟時

何ぞ必ずしも長に迹を隱さん、何ぞ必ずしも長に時を濟はん。

由來聖人道

無朕不可窺

由來 聖人の道、朕無くして窺ふべからず。

卷之不盈握

舒之互八陲

之を卷けば握に盈たず、之を舒ふれば八陲に互る。

先生道甚明

夫子猶或非

先生 道 甚だ明らかなり、夫子 猶ほ或いは非る。

願子辨其惑

爲予吟此詩

願はくは子 其の惑ひを辨せんことを、爲に予 此の詩を吟ず。

この「答四皓廟」では、『論語』「衛靈公」に見える孔子の言「邦有道、則仕、邦無道、則可卷而怀之」（邦に道有れば則ち仕へ、邦に道無ければ則ち巻きて之を懐にすべし）から「聖人」を引き、それを起点として四者の事跡を辿る。ここでの「先生」とは、高名の隱者に対する尊称と解してよいであろう。彼らは非凡な才覚を備えたが、秦始皇及び二世の暴政に遭い、有道の君主に仕え得ず、「商嶺」こと商山に隱棲することになった。李斯や酈食其ら賢人は、乱世ばかりか落命の悲運に見舞われた。しかし四人の隱棲は、かえって自らの生涯を通じた安寧を保障する処世となった。漢の高祖の末年には東宮を巡る争いが起き、高祖は戚夫人の子・趙王如意を気に入って太子にしようとし、張良・陳平らの大臣も打つ手無しという危機に瀕した。そこで四人は下山し、太子を補佐する意思を表明した。これにより、内乱は未然に防がれたのである。

この進退に対する白居易の評価は、絶讃と言っても過言ではない。隱棲あるいは仕し続けることは、どちらにも固執する必要はない。時機を見極め、且つその機を逃さず実践出来る者は「聖人」を描いて他無く、凡人は到底成し得ない。「四皓」の「先生」は、その意味に於いて「聖人」と言ってもよい、と

言うものである。

「四皓」は乱世下では出仕を拒んで隱棲し、世が安定したと見るや隱者の名声を捨て去り出仕し、結局晩節を汚して単なる張良の道具に成り果てた者になったと、元稹は「四皓廟」で「四皓」の出処進退を容赦なく批判した。それに対し白居易は、「四皓」の処世をむしろ高く評価し、この処世は「聖人」の行いに近いと讃辞を述べた。「和答詩十首・序」によれば、元稹の詩は元和五年すなわち左遷され江陵に赴く途中で制作され、長安の白居易へと送られたようである。<sup>(9)</sup>

五年春、微之從東臺來、不數日、又左轉爲江陵士曹掾。(中略) 及足下到江陵、寄在路所爲詩十七章。

五年の春、微之東臺より來たり、數日ならずして、又左轉せられて江陵の士曹の掾と爲る。(中略) 足下の江陵に到るに及びて、路に在りて爲る所の詩十七章を寄す。

左遷の境遇に在って充分に政治的手腕を揮えない元稹は、そのために隱棲に憧れ、だからこそ隱者を貫き得ず、結果的に出仕した「四皓」を批判した。それに対し、翰林学士の職にあって朝廷に重用されている白居易にとっては、自身のように治世

に出仕する者こそ最も賢明とした。この後もその視座は変わらず、一貫して「四皓」を褒め称える。この事実から推察すれば、「四皓」は彼にとつて「聖人」であったと言えよう。後ほど江州に左遷された白居易は、今一度「四皓」を題材にして「題四皓廟」（四皓廟に題す）を作った。<sup>10</sup>

臥逃秦亂起安劉

臥しては秦の亂を逃れ 起ちては劉を

安んず

舒卷如雲得自由

舒卷雲の如く 自由を得たり

若有精靈應笑我

若し精靈有らば 應に我を笑ふべし

不成一事謫江洲

一事をも成さずして 江洲に謫せらる

ここで、滯標卷の議論に戻ろう。「治まれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ」との深長な表現は、治世の到来と出仕の機を的確に見抜く者こそ「まことの聖」であると讃えたと思われる。そして、これは白居易による「四皓」に対する高い評価を、充分に理解した式部ならではの表現と言えるのではないだろうか。更に言えば、滯標卷に現れた出処進退の評価基準は、まさに白居易の価値観に基づいていたと思われる。

また賢木卷では、藤壺中宮は自身の運命を嘆き、漢代の戚夫人のような災厄を憂慮していたようである。

よろづのこと、ありしにもあらず変はりゆく世にこそあめ  
れ。戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人  
笑へなる事は、ありぬべき身にこそあめれ。

（賢木 二一—106）

紅葉賀卷では、藤壺は「唐人の袖振ることは遠けれど」の歌を源氏中将に返した。源氏は心中で、唐の朝廷の故事を踏まえた歌を詠ずる藤壺こそ後の身分に相応しいと称賛する。

「戚夫人の見けむ目」は、これまで『史記』『呂太后本紀』の凄惨な故事である「人甞」を指すと解されてきた。しかし、先帝の娘かつ中宮の位にある藤壺が、晩年の高祖の寵愛のみを頼りに成り上がった戚夫人与同様に、「人甞」にされるといふ憂き目に戦慄したとは考え難い。唐の故事にも造詣の深い藤壺のイメージする戚夫人とは、ただ「人甞」の意のみに局限して解するべきではないであろう。

恐らくは、趙王如意が結局太子に立てられないまま、呂太后

に殺された事実をも含めたと解するのが妥当ではないか。そしてこの場面には、「呂太后本紀」を通読してこそ理解し得る沈痛な戚夫人の慨嘆を投影して解すべきではないだろうか。

### 三、『文選』に見える「白虹日を貫けり」

これまで検討した例とは異なる『源氏物語』における「直接引用」の代表的な型としては、漢詩文の朗詠が挙げられる。「二十千里外故人の心」(須磨卷)や「文王の子、武王の弟」(賢木卷)などの朗詠は、『白氏文集』や『史記』が典拠と見て間違いない。賢木卷の頭弁の朗詠は、その一例である。

大宮の御兄の藤大納言の子の頭弁といふが、世にあひはなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大將の御前駆を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」と、いとゆるるかにうち誦じたるを、大將いとまばゆしと聞きたまへど、答むべき事かは。(賢木、二一117)

古注のみならず、近代の研究者の多くもまた典拠を『史記』

及び『漢書』に求める。<sup>11)</sup>劉向撰『戰國策』には「聶政之刺韓傀也、白虹貫日」(聶政の韓傀を刺すや、白虹日を貫けり)の記述があるが、これは一種の異常的天象であり、「士の怒り」が天に届いた証と見做されていた。前漢鄒陽が獄中で作った呉王劉濞への上書にも、この一句が引かれる。この上書は、『史記』卷八十三「魯仲連鄒陽列伝」また『漢書』卷五十一「賈鄒枚路伝」に抄録され、『文選』卷三十九にも採録される。<sup>12)</sup>

では、紫式部は一体どの漢籍によってこの二句を解したのでろうか。これについて、山崎誠氏の指摘がある。氏は、式部が目を通した可能性の高い『史記集解』・『史記索隱』・『漢書』顔師古注・『文選』李善注の四種を挙げて分析した。ただし、『源氏物語』本文引用箇所自体が難解であるため、どの注釈に拠るべき表現かは明らかにしておられない。<sup>13)</sup>

山下克明氏の研究では、九世紀初期以降「史漢」を学ぶ者の増加に伴い紀伝道の成立に至った背景には、「三史を通して国家経営・民衆支配の方策・経験を学ぶことにより、人材を育成し良吏たらしめんとした朝廷の方針」があるという。<sup>14)</sup>つまり、平安時代前期において『史記』『漢書』などの史書は、律令制改革に代表される政治的实践における一種の軌範を示す役割を担っていたのである。それに対し『文選』は美文の総集として

の性格を強く持ち、且つ伝来当時より複数の注釈と共に舶来した。<sup>16</sup>そして、「史漢」に比べ巻帙が少ない。このため、読者にとつてはより馴染みやすい書物であったと考えるべきではないだろうか。

また、『御堂関白記』寛弘元年十一月三日に次掲の条もある。<sup>17</sup>

事間集注文選内大臣取之、右大臣問、内大臣申云、(官)被奉官集注文選云々、事還御。

ここでの「集注文選」は、江戸末期澀江抽斎・森積園編『経籍訪古志』に記され、斯波六郎氏の研究でも著明な唐より舶来した「文選集注」と同一の書であろうか。その適否は今も明らかにし得ない。<sup>18</sup>しかし、『文選』を好んだ平安の知識人は、舶来の注釈書を勘案し、日本の読者のために注解したと見て間違いないだろう。

大江匡衡は「文選一部六十卷」を以て侍講した経験があり、<sup>19</sup>さらに「述懐古調詩一百韻」に「文選六十卷、毛詩三百篇。加以孫羅注、加以鄭氏箋」(文選は六十卷あり、毛詩は三百篇あり。加ふるに孫羅の注を以てし、加ふるに鄭氏の箋を以てす)と述べているから、<sup>20</sup>公孫羅の『文選音決』を李善注の六十巻本に加

えて文選の解釈に用いたと分かる。<sup>21</sup>『権記』にも、大江匡衡が「文選」に注したという記録がある。『権記』長保二年九月六日に、<sup>22</sup>

亦先日匡衡朝臣所傳仰注文選諸所求得冊餘卷、非一同、隨仰可令進上、

次の日の九月七日に、<sup>23</sup>

依發遣伊勢神寶廢務、奉昨日左大臣令申旨意、仰云、文選雖不具可進、

とあり、道長は大江匡衡注『文選』の中宮彰子に献上を申しつけたことがあったようである。彰子は長保元年に入内し、翌年二月に「中宮」の号を得て冊立され、その後道長が『文選』を献上した。后宮に収蔵された李善注に大江注が附された『文選』は、式部も目を通した可能性が充分にあると思われる。

そして乙女巻には、内大臣が母君である大君の宴会に出席し、秋風にちなんで朗詠する場面がある。

「風の力けだし寡し」とうち誦したまひて、「琴の感ならね

ど、あやしくものあはれなる夕かな。なほ遊ばさむや」とて、秋風楽に掻き合はせて、唱歌したためる声いとおもしろければ、みなさまさま、大臣をもうとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとにやあらむ、冠者の君参りたまへり。  
(乙女、三十一)

「風の力けだしすくなし」と「琴の感」は、間違いなく『文選』卷四十六の陸機「豪士賦序」からの引用である。卷四十六の文章からのごく自然な引用から見れば、式部はおそらく『文選』全篇を通読したと推察される。如上の事実から、前掲賢木巻は、『文選』卷三十九「獄中上書自明」の「白虹貫日」を引用したと筆者は推認する。

この立場に立って今一度物語を吟味すると、「白虹日を買けり」と吟じた頭弁その人も注目に価する。篠原昭二氏・倉田実氏らの指摘の通り、古注で「二条太政大臣」と称される右大臣の邸宅の所在地である「二条」は、藤原兼家と中関白家の本拠地であり、三条に住む左大臣に比べ当代の摂関家に近い印象がある。また花宴巻によると、桐壺帝による宮中宴会の後に右大臣が自邸で藤の花の宴を催したことがある。藤花は藤原氏の氏神である春日明神のゆかりの花である。また、藤裏葉巻に藤花

の宴を主催し、夕霧と雲居雁の結婚を承諾したのはまさしく藤原氏内大臣である。従って、物語中の明言こそ無いが、右大臣は藤原氏の一族と見て間違いないだろう。<sup>24)</sup> ならば、右大臣の孫に当たる頭弁も藤原氏一族に属するのである。<sup>25)</sup>

一条朝の権力者であり式部の後援者でもある藤原道長は、特に『文選』に関心を寄せた。『御堂関白記』には、『文選』に言及した記述もある。<sup>26)</sup>

(寛弘元年十月三日) 乘方朝臣集注文選并元白集持來、感悅無極。

(寛弘三年十月廿日) 唐人(曾) 令文所及蘇木・茶院(坑) 等持來、五臣注文選・文集等持來。

(寛弘七年八月廿九日) 作棚厨子二雙立傍、置文書、三史・八代史・文選・文集・御覽・道々書・日本記具書等具、并二千餘卷。

(寛弘七年十一月廿八日) 次御送物、摺本注文選・同文集。

式部が道長の文学的趣味と摂関家の身分に着目し、右大臣一族の設定として物語に援用したことは自明である。平安朝においては、『文選』所収詩文の構成及び表現方法を国文学に取り

入れ、広く受容されていたことも贅言を要しない。<sup>(27)</sup> こうした時代の風潮の中で式部は、道長をはじめ周りの人々の嗜みに影響され、「史漢」に比してより身近であろう『文選』から、「獄中上書自明」や「豪士賦序」などを典拠に求めたのではないかと思われる。

### おわりに

本稿は、「まことの聖にはしけれ」と「白虹日を貫けり」の二例を取り上げ、『源氏物語』の漢文引用について考察した。滯標卷「まことの聖にはしけれ」の一節は、『史記』「留侯世家」による最も古い記述よりも、『白氏文集』「答四皓廟」が表した態度に近く、「四皓」に対する評価も合致する。

賢木卷「白虹日を貫けり」は従来「史漢」を典拠とされて来たが、式部が目を通し得る書物の形式、本文における『文選』の引用状況、藤原道長の『文選』に対する好み等の要素を総合して考えれば、やはりこの句は『文選』から引用した可能性が高いと思われる。

つまり、典拠の吟味には、字句の相似・最古の用例に固執すべきではなく、作品文脈の一致または相似を最重要視しなければ

ばならないと思われる。また、原典のほか、それが引用されている総集・類書・影響作品を見逃してはならない。

また、物語本文の漢籍引用を考察するなかで、賢木巻以前は一箇所として『史記』・『文選』の引用は無いが、賢木巻にて突然に政治の闘争を描き出し、『史記』・『文選』の引用が出現する。しかも、一卷に三箇所も引用があるのである。『紫式部日記』によれば、式部は好奇の視線を避けるため漢字の読み書きの出来ない振りをして宮仕えをしたという。ではなぜ、中宮彰子に代表される漢文にさほど馴染みのない女性読者には少々堅苦しく理解しにくい漢籍を引用したのだろうか。『日記』に記される「左衛門の督」という人物が「わかむらさき」の所在を尋ねる一節がほのめかすように、源氏物語の男性読者の存在を式部が意識してきたのではないか。

このような作者としての心理及び創作意図に関する検討は別稿にて論じたい。

### 注

『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生・秋山慶・今井源衛校注・訳『源氏物語』（小学館「日本古典文学全集」）により、括弧の内に巻名・頁数を記す。

した。

- (1) 久保堅一・高橋早苗『源氏物語』と『白氏文集』研究文献目録、仁平道明編『源氏物語と白氏文集』(新典社、平成二十四年 三二—三二九頁)。
- (2) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』(桜楓社、一九六四年) 第一章第二節「典拠決定の問題」三七八頁。
- (3) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』(桜楓社、一九六四年) 第一章第二節「典拠決定の問題」五八頁。
- (4) 久保堅一『須磨の馬の嘶き』—光源氏・宰相中將の交友場面における白詩「傷友」の受容、『和漢比較文学』第五十八号、一一—一八頁。
- (5) 司馬遷『史記』(中華書局、二〇一一年) 卷五十五「留侯世家」二〇四六—二〇四七頁。
- (6) 新編漢魏叢書編纂組『新編漢魏叢書』(鷺江出版社、二〇一三年) 第二冊 五九二頁。
- (7) 袁行霽『陶淵明集箋注』(中華書局、二〇〇三年) 一六一頁。
- (8) 岡村繁『白氏文集』一(明治書院、平成二十九年) 四八〇—四八三頁。
- (9) 岡村繁『白氏文集』二(明治書院、平成二十九年) 四三八—四三九頁。
- (10) 岡村繁『白氏文集』三(明治書院、昭和六十三年) 二九一—二九二頁。
- (11) 『河海抄』は『漢書』を典拠とした。玉上琢彌編『河海抄』三〇三頁参照。また近代の注釈は主に以下の四種がある。
- a 史記及び漢書鄒陽傳に「白虹を貫く、太子これを畏る」とあり。  
(日本古典全書)
- b 『史記』鄒陽列伝、鄒陽の獄中の上書の中の一句。(新潮日本古典集成)
- c これは、讒言で囚われた鄒陽が身の潔白をあかすために孝王に上書した意見書に引用されたもので、『史記』『漢書』にみえる。(日本古典文学全集)
- (12) d 頭弁の言。史記などに見える故事。(新日本古典文学大系)
- (13) 范祥雍氏の研究によれば、「白虹貫日」は『戦国策』の本文ではなく、本文に混ざり込んだ注釈の文字である可能性が高い。范祥雍『戦国策箋證』(上海古籍出版社、二〇一一年) 一四七〇頁注(十三)に参照。
- (14) 鄒陽の上書の題は、『文選』の版本によって多少の違いがある。李善注『文選』(上海古籍出版社、一九八六年、胡克家刻本)は「獄中上書自明」に作る。また、『六臣注文選』(日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選、人民文学出版社、二〇〇八年)は「於獄上書自明」に作る。
- (15) 山崎誠『源氏物語の漢詩文朗誦』「白虹貫日太子畏之」と『風之力蓋寡』をめぐって—、『中世学問史の基底と展開』(和泉書院、一九九三年) 八九五—九〇八頁。
- (16) 山下克明『平安時代初期の政治課題と漢籍—三伝・三史・劉子』の利用—、『平安時代陰陽道史研究』(思文閣出版、二〇一五年) 三八七—四二二頁。
- (17) 『日本国見在書目録』によると、当時日本で見られる『文選』の注釈書及び関連書物は以下の九種がある。孫猛『日本国見在書目録詳考』(上海古籍出版社、二〇一五年) 参照(二〇〇六—二〇二七頁)。
- 文選卅卷 昭明太子撰。  
文選六十卷 李善注。  
文選鈔六十九卷 公孫羅撰。  
文選鈔卅卷。  
文選音義十卷 李善撰。  
文選音決十卷 公孫羅撰。  
文選音義十卷 釈道淹撰。  
文選音義十三卷 曹憲撰。  
文選抄韻一卷

(17) 東京大学史料編纂所編『御堂関白記 上』(岩波書店、昭和二十七年、第一卷二六一—二七頁)。

(18) 陳狎『集注文選』の成立過程について—平安の史料を手掛かりとして—(『中国文学論集』第三十八号、四九—六一頁)は大江匡衡が作った「集注文選」は『文選集注』とは同一書物であると指摘したが、証拠がやや足りないため今の時点では賛成しにくい。

(19) 大江匡衡「李部大卿述沈滯懷忝賜玉章聞声相応敢押本韻」に参照。統群書類従完成会『群書類従(第九輯)』「江吏部集」(八木書店、一九九二年、二一〇頁)。

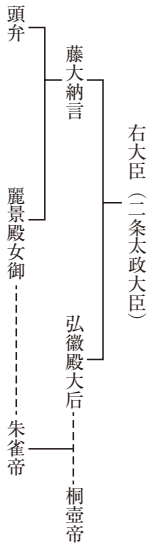
(20) 統群書類従完成会『群書類従(第九輯)』「江吏部集」、二二三頁。富永一登『文選李善注の研究』(研文出版、一九九九年)第一章「李善注前史」に参照。

(21) 増補史料大成刊行会編『権記』(臨川書店、昭和四十四年)、一五七頁。増補史料大成刊行会編『権記』(臨川書店、昭和四十四年)、一五七頁。

(22) 秋山虔編『源氏物語事典』(『別冊国文学』No.36、学燈社、一九八九年)「作中人物事典」「右大臣」条、二七三頁。西沢正史編『源氏物語作中人物事典』(東京堂出版、二〇〇七年)「右大臣」条(岡部明日香撰)、五七—六二頁。

(23) 頭弁は弘徽殿大后の兄弟の藤大納言である父を持ち、当世随一の権力者である右大臣の孫である(以下の人物関係図に参照)。花宴巻の流れは右大臣が藤原氏の一族である事実をほのめかし、そして頭弁の家系もついに明らかになる。

(24) 右大臣(二条太政大臣)



(25) 東京大学史料編纂所編『御堂関白記 上』(岩波書店、昭和二十七年)一一三頁、一九六頁。『御堂関白記 中』(岩波書店、昭和二十八年)七四頁・八二頁。

(26) 後藤昭雄「平安朝における『文選』の受容—中期を中心に」、『平安朝漢文学史論考』(勉誠出版、二〇一二年)二〇七—二三六頁。

(27) 本論文は、平成三十年一月二十八日第七十六回東洋文化談話会研究例会において発表した内容をもとにしている。